

top runner  
of kusatsu

くさつのトップランナー⑤  
いまいきと輝く草津人をクローズアップ

朗読家

稲葉 英美子 さん(54)  
いなば えみこ

## 声を出して読むこと、 聴くことの面白さなど 朗読の楽しさを広げる。

宮沢賢治の児童文学の短編集『注文の多い料理店』に添えられている「序」。稲葉さんが朗読家を志すキッカケとなった序文だ。

「賢治さんの作品を読んでいると本物の精神の糧とは何か?という問いを感じます。『序』の文章は、そんな私を朗読の世界へと案内してくれたようです。この文章が大好きです。何回読んでも、心が喜ぶのです。なので、3年前に発表した朗

読CD『しろうさぎのかぜ』の最初にこの序文を収録しました。」

朗読の勉強を始めたのが10年近く前。技術系の会社で経理事務の仕事をしながら3年間、月1回の朗読レッスンを受けた。朗読作品は新美南吉、金子みすず、太宰治、夏目漱石など数多いが、一番好きな宮沢賢治作品を朗読しているうちに『注文の多い料理店』の「序」に出合い、朗読の楽しさを素晴らしさに開眼。

序  
わたしたちは、氷砂糖をほしくらいもたないで、きれいにすきとおった風をたへ、桃いろのうつくしい朝の日光をのむことができます。  
またわたくしは、はたけや森の中で、ひどいぼろぼろのきものが、いちばんすばらしいびろうどや羅紗や、宝石いりのきものに、かわつてゐるのをたびたび見ました。  
わたくしは、そういうきれいなたへものや、きものをすきです。  
これらのわたくしのおはなしは、みんな林や野はらや鉄道線路やらで、虹や月あかりからもらつてきたのです。  
ほんとうに、かしわばやし青い夕方を、ひとりでも通りかかったり、十一月の山の風の中に、ふるえながら立ったりしますと、もうどうしてもこんな気がしてしかたないのです。ほんとうにもう、どうしてもこんなことがあるようにしかたないことを、わた

くしはそのとおり書いたまです。  
ですから、これらのなかには、あなたのためになるところもあるでしょうし、ただそれだけのところもあるでしょうが、わたくしには、そのみわけがよくつきません。なんのこたか、わけのわからないうところもあるでしょうが、そんなところは、わたくしにもまた、わけがわからないのです。  
けれども、わたくしは、これらのちいさなものがたりを幾きれかがおしまひ、あなたのおすきに、おたはんとおたへものになることを、どんなにねがうかわかりません。  
大正十二年十二月二十日  
宮沢賢治



賢治自らの創作姿勢や生き方について言及した『注文の多い料理店』の序文と朗読する稲葉さん

やがて退社し、プロの朗読家の道を歩む。2011年、朗読教室や朗読ライブ、朗読CDなどの販売を通じて朗読の普及に努める「しろうさぎのかぜ朗読教室」を設立。1年後の9月には朗読文化の振興に寄与することを目的とした一般社団法人日本朗読協会(代表理事・原田里美)の設立に参画し、自ら理事に就任した。

「おうみのしろうさぎ」のステージネームを持つ稲葉さんは、多彩なイベントに呼ばれることも多い。そんなとき心がけているのが「心がふり向く朗読」だ。「朗読は心地よく聴き手に伝わるのが大切。心が喜ぶ、心が温まる、心が満たされる、心が懐かしがる。このどれか一つも感じていただければうれしい」と稲葉さんは話す。



お問い合わせ先 「しろうさぎのかぜ朗読教室」 <http://shirousaginokaze.com//>  
主なカルチャー教室(バルコ大津・JEUZIAアルプラザ瀬田・滋賀リビング草津)